

目ざめているとはどういう事ですか

「ですからわたしたちは、ほかの人々のように眠ったままでいないようにしましょう。むしろ目ざめていて、冷静さを保ちましょう。」(テサロニケ第一 5:6)

あなたは本当に目ざめていますか。

目ざめているとはどういうことでしょうか。

このことに関連した「ものみの塔」の記事を抜粋してみました。

*** 塔 02 4/1 29 ページ 目ざめていて、勇気をもって前進しなさい！ ***

最後の話の結びに、訪問講演者は統治体の準備した感動的な声明を読み上げました。それは一部次のように述べていました。「今は、目ざめていて、ずっと見張りつづけ、世界情勢がどのように進展するかを見極めるべき時です。……エホバの民はどこにいても、この危機の時代に目ざめていて、エホバの一致した組織と共に勇気をもって前進しつづけることを決意しています。

*** 塔 75 9/15 561 ページ 3 節 すべての事において冷静を保ちなさい ***

危険の重大性は、世界情勢が悪化しつつある昨今増大しました。ですからわたしたちは、急速な時の流れと目まぐるしく変化する世界情勢とに混乱させられないよう、分別をもってその危険の重大性を考えなければなりません。また今は思いを鈍らせる時でもありません。『エホバの日はまさに夜の盗人のように来る』と、パウロは警告し、次いで「ほかの人びとのように眠ったままでいないように……むしろ目ざめており、冷静さを保ちましょう」と勧めています。(テサロニケ第一 5:2, 6-9)

目ざめているとは、基本的に、意識を明確に保ち、知覚力や判断力をはつきりとは働かせられる状態であることです。

聖句の述べる「目ざめている」ということは、とりもなおさず、預言と直結しています。クリスチャンが常に「知覚」「判断」している必要のある事柄は「預言の成就」です。もちろん様々な事柄に関して「何がエホバのご意志」なのかを見極めてゆく必要がありますが、その中で「目ざめて」いるべき筆頭に挙げられるのが、エホバの目的の進展を鋭く見守っていることです。

冒頭の聖句の中でパウロが述べた「ほかの人びと」とは、クリスチャンと自称する少数の人々も含まれるようですが、霊的に眠り込んでいてイエスの「臨在」やきたるべき悪しき者の「突然の滅び」について無関心な人々をさします。(塔 79 6/1 5)

と記されているように「イエスの臨在」や「突然の滅び」をどのように事前に確かめ、それがどういう成り行きで起きてゆくのかについて聖書は述べているわけですから、聖書預

言については、「勤勉な探求と注意深い調査」(ペテ I 1:10)をして「正確な知識にいたる」ことが神のご意志であり、強い願いでもあります。

このことの重要性についてイエスはこう述べておられます。

「偽善者たち、あなた方は地や空の様子調べ方を知っているのに、この特別な時の調べ方を知らないのはどうしてですか。なぜあなた方は、何が義にかなっているかをも自分で判断しないのですか。」(ルカ 12:56 - 57)

「その日と時刻は誰も知りません」「それはよるの盗人のように」と言われているのに、「この特別な時の調べ方を知らない」のは、知ること真剣に取り組まないのは「偽善者」だと言われています。

また、何が神のご意志なのかを「も」「自分で判断」すべきであると強い口調で語っておられます。

ですから誰かに判断してもらったものを鵜呑みにする、あるいはただそれを受け入れてひたすら覚えるだけという人を、イエス・キリストは「偽善者」とみなされます。

確かに預言の研究は、とりわけ、自分自身で、聖書そのものの記述と世界情勢やこれまでの歴史の事実などを比較検討し「自分で判断」することは、きわめて「重要な事柄」です。

「あなた方の愛が、正確な知識と十分な識別力に伴っていよいよ満ちあふれるようにと。それは、あなた方がより重要な事柄を見きわめるようになり…」(フィリピ 1:9 - 10)

さて、「目ざめている」ということには、「目を覚ます」ということも関係してきます。

歴史におけるキリスト教の進展を見ると、一人残らず「眠った状態」からの出発となります。ある人は「私はクリスチャン2世なので、生まれたときから真理にいる」と言った人がいましたが、幼児期には、知覚、判断力がないので、やはり、全ての人は「眠った状態」からの出発と言えます。

「あなた方は時節を、すなわち今がすでに眠りから覚めるべき時であることを知っているのですから、そのゆえにもこれを[行ないなさい]。今や、わたしたちの救いは、わたしたちが信者になった時よりも近づいているのです。(ローマ 13:11)

パウロがこれを書いた時、西暦70年の滅びが近づいていましたので、時宜にかなった警告でした。

また「眠りから覚めた」としても、目ざめ続けていないで、また眠ってしまう事や、「眠りから覚めた」と思っていたのにそれは夢の中だったと言うことがあることを「ものみの

塔」誌は述べています。

*** 塔 796 / 15 29 ページ「わたしたちは、ほかの人びとのように眠ったままでいないようにしましょう」***

「現代において、この種の霊的な眠りつまり無関心は、パウロの時代よりもはるかに多くの人々に影響を与えています。・・・

パウロは『わたしたちは、眠らないようにしましょう』と訓戒して、真実のクリスチャンでさえ眠りに誘い込まれないように注意しなければならないことを示しました。弟子たちがイエスと共にいた最後の夜に、目覚めていなさいというイエスの勧めにもかかわらず眠り込んでしまったことを忘れてはなりません。弟子たちの眠りは肉的な性質のものであったとはいえ、霊的な眠りに陥る傾向のあることを示しています。イエスは「このような時に、あなたがたは眠って休んでいる！」と言われました。」

「眠りのもう一つの特色は夢です。夢は永続する幸福をもたらすことがないばかりか、目覚めて正真正銘の現実に立ち帰ったときに失望をもたらすことさえあるのです。イザヤ 29 章 8 節（新）はそのことを次のように言い表わしています。「飢えている者が夢を見、食べているのに、実際、目が覚めると、その魂が空である場合のようになる」。

わたしたちが変わりゆく世界の現実に対して眠った状態になり、・・・“夢”の中で生活しているということがありうるのではないのでしょうか。ちょうど夢見る人に時間の感覚が欠けているように、わたしたちは今生きている時代の切迫感を失っていますか。」

この、後半の部分の「夢」に関する記述は、焦りにも似た、妙な緊張感を呼び起こします。夢を見ている時に「これは夢だ」と認識することはまずありません。

本当に目が覚めた時、初めて、「ああ、夢だったんだ」と言うことが分かるというものです。「今見ているこれが、まさか夢って事はないだろう、いや、ないない、絶対あり得ない」という夢を見たことがありますか。

今世紀初頭に霊的な眠りから目ざめさせられて、活発に奉仕に携わった人々から、すでに 100 年以上の月日が流れました。

その間のそれぞれの時代のエホバの証人が見ていたものは、今の私たちが見ているもの、期待しているものとは相当に違うものでした。

例えば、1914 年以前の人々は、1874 年に王国の王となった天のキリストを霊的な目で見ていました、そして 1914 年の秋以降にはキリストがその後 1000 年治める樂園となった地球を臨み見ていました。彼らは、揺るぎない信仰を抱いて、それらを確信し、眠気のかけらもないほど、目ざめていました。

と当人たちは思っていました。

しかし実際はどうだったのでしょうか。

彼らは本当に眠りから覚めていたのでしょうか。それとも夢を見ていたのでしょうか。

1914年以降も生き続けた人々は、後者であったことを思い知らされました。

1920年には自分たちは一斉に天に上げられて空中でキリストに会うということを多大の期待を抱いて、その時の喜びにあふれた自分の姿を見ていました。

眠りから目を覚ました人々は1925年にハルマゲドンに遭遇することは1914年の時以上に絶対確実であるということ、確信していました。それは1925年が過ぎ去るまで続きました。

1975年の数年前は空前の大フィーバーでした。その年が近づくにつれ、少なからぬ人々が、会社を退職し、保険を解約し、住まいを売り払いました。

その年に起こるハルマゲドンとその後続く輝かしい地上の楽園を、一点の疑いもなく確信していたからこそ、現実にならざるを得たのです。

それらの人々は、「目ざめて」いたのでしょうか。それとも「夢」を見ていたのでしょうか。

「目覚めて正真正銘の現実に立ち帰ったときに失望をもたらすことさえある」

これまで、幾度となくエホバの証人は否応なく目ざめさせられて正真正銘の現実に立ち返らざるを得なくなったとき、度重なる失望を経験してきました。

しかし、今自分が見ているものは決して「夢」なんかじゃない。でありたいと思います。ここにキリストが、「あなた方はなぜ、この特別な時の調べ方を知らないのですか、なぜ何が義に適っているかをも自分で判断しないのですか」と強い口調で訴えられた大きな理由があるように思います。

「“夢”の中で生活しているということが」絶対にあり得ないとは言えないのです。

「全てを確かめる」ことはいつの時代でも必要なことです。

「すべて」のこの中に例外があるべきでしょうか。聖書そのものが「聖書がその通りかどうか、日ごとに注意深く調べる」ようにと述べているので、「それは神の言葉なので調べてみたりするべきではない」と言うなら、聖書に反することになります。

「日ごとに」というのは、最初に聞いたときだけ、ではなくその後もずっと、「常」にそうしたスタンスを保つべきと言うことです。

聖書をそのように調べてみる人は「褒める」べき人とみなされます。

では協会の出版物はどうでしょうか。

「それは任命された奴隷級の言葉なので調べてみたりすべきではない」という見解を聞くことがあるのですが、それは聖書に適っていますか、それとも非聖書的でしょうか。

「協会の出版物を調べる」という言葉が使われるとき、その意味は、索引から探して、受け入れて当てはめるという意味です。

協会の出版物は「学ぶ」もの、であって、それが本当かどうか注意深く調べてみることは勧められていません。

敢えてそうする人は危険人物のように見られます。

時々、ある研究生が、エホバの証人は「ものみの塔」と聖書を実質的にほとんど同等のようにみなしている」と述べたりしますが、そうした非難は間違いだと言うことがわかります。

聖書は調べるべきもの、ものみの塔は、ただ受け入れるべきものです。

決して同等にみなしているわけではありません。

それはともかく、わたしたちはクリスチャンとして、全てのことを確かめるのが神のみ前における責務と言えます。

そしてやはり、ものみの塔2002年4月1日号が述べている先に引用した言葉を覚えておくべきでしょう

「今は、目ざめていて、ずっと見張りつづけ、世界情勢がどのように進展するかを見極めるべき時です。…エホバの民はどこにいても、この危機の時代に目ざめてい（なければなりません）。

2002年に語られた「今は」から、すでに7年経過し、今年は2009年を迎えました。そして世界情勢は2002年の頃から激変しています。

何と言ってもアメリカが危ないのです。

アメリカの世界に対する一極支配が終わりを告げようとしている、世界のトップとして君臨した時代に幕を下ろすカウントダウンがすでに始まっているとさえ、言われています。これは、想定外であり、終末のシナリオにはあってはならないものです。キリストの王国が立つ時代に存在するのは最後の第7世界強国でなければならないからです。

アメリカが世界強国の座を譲り渡す事態になると、第7世界強国は実はこれから起こるといふ事になるのです。

英米が第7世界強国と見えていたのは「夢」だったということになるのです。そしてそうになると当然、第7の時代の最盛期に立つことになるキリストの王国もまだだということになってしまうのです。

今こそ、**世界情勢がどのように進展するかを見極めるべき時です。**